

さるの裁判さいばん

昔むかし。

とらが落としあなに落っこちて、出られなくなりました。男の人が通りかかって、とらのほえる声を聞きました。あなをのぞきこむと、とらがあわれな声でいいました。

「ああ、どうか、ここから助けだしてくれ。きっと恩返しおんがえをするから」

男の人は、

「かわいそうに。ちょっと待っている」といって、長い木の枝えだをさがしてきて、あなにおろしてやりました。とらは、枝につかまっではい上がってきました。ところが、上にあがるやいなや、とらは、大きな口を開けておそろしい声でいいました。

「おれはもう、はらがへつてたららん。悪いが、おまえを食わせてもらおう」

男の人はびっくりして、

「この恩知らずめ」とどなりました。けれどもとらは、いまにもとびかかろうとします。

男の人は、

「ちょっと待て。さるのところへ行つて、おまえのやりかたが正しいかどうか裁判してもらおうじゃないか」といいました。

「よし」と、とらはいいました。

とらと男の人は、さるのところにでかけていきました。

さるは木からおりてくると、それぞれのいいぶんを聞きました。男の人が、

「おれは、こいつが落としあなに落っこちているのを助けてやったんだ。それなのに、おれを食おうつていうんだ」というと、とらは、

「おれは長いことあなの中にいて何も食べていない。はらぺこで死にそうなんだ」といいます。

するとさるはいいました。

「ううむ。まず事件じけんの起こった現場げんばをしらべてみよう。わたしをそこへつれていきなさい」とらと男の人は、さるを落としあなのところまでつれていきました。さるは、

「とらよ。そのとき、おまえは、どこでどんなふうにしていたんだね」とききました。と

らは、

「こうだ」というと、落としあなにとびこみました。

さるは、男の人にいました。

「おまえも、これからは、あんな悪いやつを助けるもんじゃない。さあ、帰りなさい」
そして、あなのなかのとらにむかって、

「恩知らずめ。これでもとどおりだ。死ぬなり生きるなり、かってにしろ」といって、山に帰っていきましたとき。

原話…『朝鮮民譚集』孫晋泰著／勉誠出版

再話…村上郁